

ニケーションパターンや夫婦関係満足度と関連することを示した。研究 C では、子どもから親への呼称が子どもの認知する親の養育態度、親子の会話、そして、親子関係と関連するかどうかを検討している。329 名の大学生と専門学校生に本人から親への呼称と本人の認知する親の養育態度、会話頻度、そして、親子関係満足度の質問紙に答えさせた。結果は、子どもが親を親族名称で呼ぶ群は、呼ばない群に比べて、両親への情緒的接近を認知しやすく、両親との会話頻度が高いと報告している。

研究 D では、規範から逸脱した家族内呼称と通常の家内呼称との間の意味的な違いを検討している。298 名の大学生が子どもから親への呼称を評定し、161 名の大学生が配偶者への呼称を評定した。その結果、規範から逸脱した家族内呼称は、規範に従った家族内呼称と比べて、疎遠で、横柄で、問題を含む、と評定している。研究 E では、規範から逸脱した家族内呼称が家族機能と関連することを検討している。84 名の男子高校生が家族内の全ての家族内呼称と彼らの認知する家族機能について答えている。その結果、規範から逸脱した家族内呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて、家族の問題解決能力、情緒的反応、情緒的関与、行動統制が非機能的であると報告している。研究 F では、規範から逸脱した家族内呼称と家族内の緊張・葛藤度との関連を検討している。329 名の大学生・専門学校生が家族内の全ての家族内呼称と家族内の全ての家族関係の緊張・葛藤度に回答している。結果は、規範から逸脱した家族内呼称を使用する父子関係、夫婦関係は、そうでない父子関係、夫婦関係よりも緊張・葛藤度が高いことを示している。また、規範から逸脱した家族内呼称を使用する家族はそうでない家族よりも家族全体の緊張・葛藤度が高いとしている。研究 G では、規範から逸脱した家族内呼称と家庭内での暴力的事象との関連を検討した。153 名の大学生が家族内の全ての家族内呼称と家族内の暴力的事象について答えたとしている。その結果、規範から逸脱した家族内呼称を使用する父子関係、母子関係、夫婦関係は、そうでない父子関係、母子関係、夫婦関係よりも家庭内での暴力的事象への関与が高いとしている。研究 H では、規範から逸脱した家族内呼称と過食傾向との関連を検討している。166 名の女子学生が家族内の全ての家族内呼称と過食傾向について答えた。その結果、規範から逸脱した家族内呼称を使用する家族は、そうでない家族よりも過食傾向が高いことを示している。

仮説 1 は研究 A 及び研究 C で支持され、仮説 2 については、研究 D, E, F, G, H で概ね支持されたことを示した。最後に仮説 1 と 2 との理論的関連を提示し、家族内呼称の家族のアセスメント指標としての有用性を指摘している。

〈論文審査の結果の要旨〉

本論文における、著者の視点は独創的なものを含む。それは家族関係や、家族構造を知るのに従来は、多種の質問への反応から抽象された複数の因子上の得点の組み合わせから、それを予想するものが多いわけであるが、著者は、家族内で既に日常的に用いられている「呼称」が、それを示す可能性があることを主張する。

そのために大きく二つの仮説をたてて検討している。それは、「家族内呼称は家族関係と関連する」であり、いまひとつは「規範から逸脱した家族内呼称は家族成員や家族関係、家族集団を非機能的にする」である。この仮説について、A から H まで、8 種の実証的な検討を加えた。著者は、テーマとする問題について、理論的な仮説を得るまでに、先ず、内外の文献、それは、当該の臨床心理学分野はもちろん、発達心理学や精神医学といった近隣関連分野はもとより、言語学、教育学、家族社会学などにも及ばせて、具体的なものに絞り込んでいる。この手続きが、著者の独創的なテーマの客観性を、保証するものとしている。

次に本論文が、臨床心理学分野のうち家族臨床の分野から始まった、言語と行動、そしてその使用者の相互的な拘束的影響について、「ダブルバインド理論」以来の研究の流れにのっとり、それを進めているものになっていることを評価したい。それは家族内の呼称が、家族成員各自の個人的な嗜好で決定されるものでないことは容易に理解されるが、本論文は、その決定過程の一部を予想させるものになっていることや、呼称による心理的な親和感の相違や拘束力の違いなどを予想させるもので、興味深いものを指摘し検討したものになっている。

本論文で示された、調査への回答方法にも独創的なものが認められる。そのひとつは、家族成員の各組み合わせについて、相互的に決まってきた「呼称」を巡る諸種の変数値を直接にマトリックス様の回答用紙に記入させるのもので、煩雑さを減じるために予備的な研究を行ったうえで、記入を数値にするなどの工夫を加えて、有効な方法を生み出している。これは当の調査協力者にも家族の一部だけではなく、システム全体への自身の日常の在り様を俯瞰させるものにもなっていて、その後の臨床的介入へのヒントをなるものを予想させ、興味深い。

また本論文が主に準拠する家族臨床の分野には、個人の内的な心理過程よりは個人間の相互作用に、より焦点をあてて立論する方法論上の伝統がみられるが、本論文もまた、呼称という、外的に観察可能なものから家族関係、家族機能などを予想しようというスタンスを採用している。このスタンスが本論文で扱われているテーマについて、より実践性が高いものに仕上げていると感じさせる。

主に研究 D 以降で、「規範から逸脱した家族内呼称が家族成員や家族関係、家族集団を非機能的

にする」ことを検討しているが、著者は先ず、社会学や人類学分野の先行研究を検討して、呼称が集団の規範を示すものでもあることを示す。この文脈で著者は、注意深く、家族内呼称が当該家族のもつ規範内にあるものと、そこを逸脱するものとを分ける基準を検討している。それは愛称や一時的な冗談という文脈で用いられるそれらとの峻別を含むもので、難しいものを含むと予想されるが、著者は操作的な手順を用いて、読者に、その妥当性を納得させるものにして、論述を進めている。その結果、1 規範から逸脱した家族内呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて、家族の問題解決能力、情緒的反応、情緒的関与、行動統制が非機能的であることを示し、2 規範から逸脱した家族内呼称を使用する父子関係、夫婦関係は、そうでない父子関係、夫婦関係よりも緊張・葛藤度が高いことを示した。また、規範から逸脱した家族内呼称を使用する家族はそうでない家族よりも家族全体の緊張・葛藤度が高いことを示した。3 規範から逸脱した家族内呼称を使用する父子関係、母子関係、夫婦関係は、そうでない父子関係、母子関係、夫婦関係よりも家庭内での暴力的事態への関与が高いこと等を示した。

本論文は有審査の学術雑誌に投稿、採用された複数の論文を中心に、その後の研究も加えて発展させたものであるが、博士論文として統一的に構成するにあたり、論述の進行や結果の考察でやや問題を感じさせないものが無いわけではない。しかし、調査を主とした実証的研究群や終始見られる臨床的な応用への姿勢など、現在のこの分野の研究水準にかなうのは勿論、牽引的な獨創性を標準以上に感じさせるものを持つ。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。